

# 新興宗教「俺らについて」の概要

2022年5月18日 水曜日

以下では、彼（教祖）は新興宗教「俺らについて」について述べる。始めに、彼はこの宗教における宗教観を提示する。次に、彼は世界に対するこの宗教系統の認識を提示する。そして、彼はこの宗教系統の目的を提示して、自己を設定する。その後、彼はこの宗教系統の善悪及び死生観及び富の規範、性規範、約束（契約）、刑罰、統治を提示していく。なお、この文章は3人称形式であり、かつ現時点では「未完」である。彼は完璧な宗教を理論的に作ろうとして失敗してきたので、彼は不完全な理論を一度提示することに決めた。

## この宗教における宗教観

始めに、彼は「俺らについて」における宗教観を提示する。「俺らについて」では、宗教とは、社会システムの一つである。例えば、このシステムはサッカーのような運動競技である。この場合、宗教は人間競技である。彼はこの宗教を拡張して、国家や文明を形成していく。彼は国家や文明も一種のシステムと認識する。社会はソサエティである。

この時、宗教の目的とは、自己の社会の形成のためである。例えば、世界には、セム系宗教（ユダヤ、キリスト、イスラム）や仏教や儒教、ヒンドゥー教がある。それぞれの信仰者は自己の宗教系統の善悪を持ち、自己の宗教系統の法体系を持ち、自己の宗教系統の人生を形成している。ユダヤ教徒の西側白人はユダヤ教系統の善悪を持ち、ユダヤ教系統の法体系や性規範や富の規範をもち、ユダヤ教系統の人生を形成している。そうして、彼らは自己のソサエティや自己の文明を形成してきた。なお、大和民族はどの宗教系統の人生を形成しているのか不明である。

彼（教祖）はこの事実を認識して、彼はこの宗教を自己の社会システムを形成するものと認識して、決定する。「俺らについて」は自己の社会システムを信仰者に授ける。そこには、自己の系統の認識や自己系統の人間性が含まれる。加えて、この宗教は自己系統の人間性や自己系統の認識、自己系統の善悪及び死生観及び富の規範、性規範、約束（契約）、刑罰を信仰者に授ける。

この時、信仰者は異教徒や異文明民、異人種にビクビクと怯えることなく、自己を持って彼らと対峙することができるようになる。この宗教は自己の社会の形成のためにある。この時、信仰者は「俺らについて」系統の人生を形成して、その道を歩むことができるようになる。

なお、予想される誤解は次である。宗教は信者を救済する何か、修行する何か、安心を求め不安から逃避して縋り付く何か、困った時に神頼みする何かである。これらはこの宗教における宗教観と異なる。

## 世界に対する「俺ら」系統の認識

ここでは、彼は世界に対する俺ら系統の認識を提示する。認識は世界に対する現時点での捉え方と言っても良いかもしれない。彼はこの世界を物質と意識（蟲）と運転手（ヌシ）からなっていると認識する。彼らは物質を知覚する。彼らは自己の意識を捉える。彼らは運転手と他者の意

識を信仰する。また、彼は意識は物質から分岐して、運転手は意識から分岐していると認識、または信仰する。さらに、彼は分岐は今現在実行されていると認識、または信仰する。つまり、今現在、意識は物質から分岐して、運転手は意識から分岐してる。

物質は物質である。または、**物質**とは、エネルギーを持つ対象である。物質は物理学の対象である。経験的には、物質は機械的であり、自動的に運動する。一般的には、物質は知覚される。

**意識（蟲）**は視界や聴覚の感覚や味覚や痛覚である。宗教的な用語では、彼は意識を蟲と呼ぶ。彼は蟲という単語を漫画蟲師から拝借した。視界は物質できない。おそらく、意識は物質それ自体でない。思考の規範では、もし視界が存在するならば、脳が存在する。これは経験的である。睡眠中は視界は存在しないが、脳は存在する。意識は質量やエネルギーや色や形を持たない。意識は存在や状態を持つが、意識それ自体は運動しているのかは不明である。意識の位置も不明である。また、目の色が異なると、視界それ自体も異なる。なお、彼は彼自身の意識を把握することができるが、他者の意識を把握することができない。ただし、意識はエネルギーを持たないので、何が（運転手が？）意識を把握しているのかは不明である。

**運転手（ヌシ）**は意識を捉える何かである。宗教的な用語では、彼は運転手をヌシと呼ぶ。彼はその単語を神道に関係した山のヌシや川のヌシのヌシから拝借した。運転手それ自体は物質や意識でない。思考の規範では、もし運転手が存在するならば、意識が存在する。これは怪しい。意識と同様に、運転手は質量やエネルギーや色や形を持たない。運転手は存在を持つが、状態や運動を持つのかは不明である。この宗教では、彼は運転手を自己と決定する。動物の運転手とサピエンスの運転手は互いに異なるのかは不明である。彼は自己の運転手を知覚しないが、何か実際に存在すると感じ取っている。彼は運転手を知覚することができない。また、彼は運転手を認識しているのか、その存在が実際であると信仰しているのか不明である。もし認識が物質や知覚に依存するならば、彼は運転手を認識していない。彼は他者の運転手を感じ取ることができない。

さらに、彼は分岐を次のように認識する。下記の認識は認識よりも信仰に近いだろう。

運転手が意識に対応して、意識が物質に対応しているのかは不明である。運転手が意識から分岐して、意識が物質から分岐しているのかは不明である。ただ、彼が分岐と解釈する時、意識は物質から分岐した対象であり、運転手は意識から分岐した対象であると捉えることができる。対応の場合、意識とは、物質に～に対応する対象であるという文が生じる。

また、彼が分岐を使用するならば、彼は善悪の正当化を分岐で実行することができる。対応だと、彼はそれを実行することが難しい。このため、彼は分岐を使用した。さらに、彼が分岐を対応に置き換えるとき、この宗教の目的が対応になる。彼はその単語に違和感を覚えるので、彼は分岐を使用する。

彼の認識は次である。意識は物質でないが、物質を基盤として物質でないものが生じている。同様に、運転手は物質でも意識でもないが、物質や意識を基盤として物質でも意識でもないものが生じている。彼はこの認識を対応でなく、分岐で捉えた方がより彼の認識に近いと感じた。だから、彼は分岐という単語を使用した。対応の場合、ある対象が同じ種類の対象に対応しているという印象がある。もし対応が意識と物質の間に使用されるならば、意識と物質は同じ種類の何か

であるべきである。彼はそのように認識しないので、彼は対応でなく分岐を使用した。ただ、もし彼が分岐よりも適切な単語（動詞？）を発見するならば、彼はその単語を使用するだろう。

## 「俺ら」系統の自己

ここでは、彼は自己を設定する。もし人種や民族や文明や宗教、そして個体が互いに異なるならば、彼らの自己それ自体も互いに異なる。ある主体aは自己の肉体を自己と感じている。

例えば、その主体は鏡に映し出された自己の顔や自己の肉体を自己それ自体と感じている。別の主体bは自己の視界それ自体を自己と感じている。この時、その主体bは自己それ自体は鏡には映し出されないと感じる。別の主体cは彼らが見たものや聞いたものを自己を感じている。その別の主体は日本列島それ自体を自己それ自体を認識している。このように、異なる個体や異なる宗教は何が自己であるのかを授ける。

一般的に、人間は自己を既存のものに対応させて、自己を認識している。人間が自己を何に対応させるのかを人工的に決定する。たとえ彼が自然界の全てを明らかにするとしても、自己を何に対応させるのかが唯一に善であるのかを知ることができない。だから、何を自己に対応させるのかは文明や宗教に関する話題である。

彼は彼系統の自己を自己の運転手に対応づける。この宗教では、彼は物質と意識（蟲）と運転手の3種類を認識、または信仰する。彼は彼系統の自己を自己の運転手に対応づける。彼は自己を自己の肉体に対応づけない。彼は自己を自己の意識（蟲）に対応づけない。

彼は自己を自己の肉体に対応づけない。だから、たとえ彼が彼の肉体を鏡に写し出すとしても、彼の肉体は写し出されるが、彼の自己それ自体（運転手）は映し出されない。つまり、彼の自己は鏡やそのほかの物質には映し出されない何かである。同様に、彼の意識も鏡や物質には写し出されない。また、彼の自己は意識にも写し出されない。

例えると、彼の肉体は車体である。彼の意識、特に彼の視界は車体の中の立体映像（ホログラム）である。彼の自己は車体の中の運転手それ自体である。この宗教では、彼は自己をその運転手それ自体に対応させる。

## 「俺ら」系統の目的

物質世界には、目的は存在しない。目的は人工物である。一般的には、目的はx教系統の目的という形式で存在する。ユダヤ教系統の目的は仏教系統の目的と異なる。もしある主体が自己の人生に関する目的を持たないならば、その主体は迷走する。

「俺らについて」の一番目の目的は彼の運転手、または彼らの運転手の復活である。「俺らについて」の二番目の目的はこの世界からの分岐である。「俺らについて」の三番目の目的は運転手でない新たな自己の創造である。なお、彼（教祖）はこの目的の実現法を知らない。彼らの子孫が実現する。

この宗教では、彼は意識や運転手は物質から分岐していると信仰する。だから、彼は物質に関する決まりに従わない何かがあると憶測する。彼はこの憶測を使用して、彼は運転手の復活の実現を信仰する。例えば、里を抜けた忍者は里の掟に従う必要はない。同様に、もし意識や運転手が物質世界という里から分岐しているならば、それらはその里の掟には完全に従っていない可能性がある。だから、里では、できない何かができるかもしれない。彼はこのように信仰する。

例えば、生まれたら死ぬというのは物質世界を観察、分析した結果である。しかし、もし意識や運転手が物質世界から分岐しているならば、それらには、物質世界の掟は完全には適用されない可能性がある。実際、彼の認識では、意識を持つ対象は完全には自動的に運動していないように見える。さらに、運転手を持つ対象は非自動的、かつ目的的に運動しているように見える。

彼は次のように信仰する。彼の運転手が生まれたのは意識からの分岐の結果である。物質のみの世界には、彼の自己は存在しない。たとえある自己が存在するとしても、その自己は物質である。意識のみの世界にも、彼の自己は存在しない。たとえある自己が存在するとしても、その自己は意識である。つまり、彼の自己が存在するのは分岐の結果である。だから、もしさらなる分岐が生じるならば、運転手でない自己が発生するかもしれない。彼はこう憶測する。これが三番目の目的である。

この宗教では、彼は分岐を目的とする。なぜなら、彼の運転手が復活するためには分岐が必要である。また、彼の運転手でない自己が復活するためにも、分岐が必要である。これらの目的を実現するためには、分岐が必要である。

## 「俺ら」系統の死生観

この宗教では、彼は彼の自己の復活を信仰する。だから、「俺らについて」では、彼は永続的な生を持った死生観を信仰する。一般的に、死生観はx教系統の死生観という形式で存在する。宗教が異なる時、異なる死生観が存在する。例えば、ユダヤ教やキリスト教、イスラム教では、天国や地獄の存在が信仰される。外部から見ると、彼らは唯一の創造主及び神によって生かされているように見える。

彼は彼の子孫が彼の運転手の復活を実現させることを信仰する。口語的には、彼の運転手は一度死ぬが、いつか復活するだろうと信仰する。彼は彼の運転手がいつどこに復活するのかすらよくわからない。復活した運転手がどうやって復活したことを認識するのか、記憶はどうするのか。

彼は彼の運転手を復活させるために、彼はいつと言う時間やどこと言う場所（空間）について調べる。彼は彼の運転手を現在のような同一の世界に復活させるのか、または平行宇宙のような世界に復活させて、別々に生きるのかも決めていない。

また、彼は彼の運転手の復活を信仰するので、彼は彼の肉体や意識を復活させる必要はない。現時点では、彼の運転手は彼の肉体や意識なしに存在しない。その状態は彼の運転手は意識や物と言う畑なしには存在しないことに似ている。

しかし、復活の際には、彼は運転手を純粹に取り出して、運転手のみで魂や魂魄のように生きられるようにしたい。また、運転手は意識と一対一に唯一に対応しないので、現在の対応は奇跡的に思える。彼は彼の運転手をどうやって復活させるのかも不明である。

**生（生きている）**とは、生とは、運転手が意識世界から分岐している状態である。分岐世界観では、物は無から分岐して、意識は物から分岐して、運転手は意識から分岐している。巴世界観では、物と意識と運転手は3重に成立している。

そして、今分岐世界では、物は今無から分岐していて、意識は物から今分岐して、運転手は意識から今分岐している。彼は彼の生という状態をこのように信仰する。生とは、運転手という自己が意識世界から分岐している状態である。もし彼が新たな自己を分岐によって創造するならば、その時、生とは、その自己が運転手から分岐する状態になるだろう。

**死（死んでいる）**とは、運転手が意識から分岐されなくなる状態である、または意識が物から分岐されなくなる状態である、または物が無から分岐されなくなる状態である。死とは彼の運転手が分岐されなくなる状態である。日常的には、彼が交通事故にあう時、彼の肉体は破壊されて、あれは死ぬ。彼の肉体の状態は正常でなくなった結果、彼の意識の分岐状態が破壊された。

運転手の存在は意識の存在に依存しているので、意識の分岐状態がなくなると、意識の存在それ自体が失われる。意識の存在がなくなると、運転手の存在も分岐状態も意識の存在に依存しているので、運転手の分岐状態もなくなる。つまり、運転手が存在しなくなる。

生は運転手の意識からの分岐である。つまり、死とは、運転手の分岐状態の喪失であり、その状態がなくなると、運転手が存在しなくなる、つまり運転手が死ぬ。この意味での復活とは、一度、分岐状態が失われた運転手を再び分岐させることである。死や生がきちんと認識、信仰された後、復活という行為がきちんと認識、または信仰される。当然、復活の対象もきちんと定められるべきである。

## 「俺ら」系統の善悪

以下では、彼はこの宗教における善悪を提示する。善悪に対する彼の印象はサッカーなどの運動競技における善悪（レッドカード）である。彼が社会システムを創造するとき、彼はどんな行為が悪い（レッドカード）であるかを設定する必要がある。

また、彼が善悪を提示する時、彼はその善悪の正しさ（正当性）を提示する必要がある。一般的には、善悪の正当性はこの世界の創造主によって授けられる。この宗教では、彼はこの宗教の目的がこの宗教における善悪を正当化すると信仰する。

世界には、キリスト教系統の善悪やイスラム教系統の善悪、儒教系統の善悪や仏教系統の善悪が存在する。そして、これらの善悪の全ては父系であって来た。一般的に、善悪はx教系統の善悪という形式で存在する。宗教が異なるとき、異なる富の規範が存在する。例えば、キリスト教では、平等が善であるが、儒教では、平等は必ずしも善でない。

この宗教の目的は分岐である。だから、彼はこの目的を使用して、この宗教における善悪を定める。彼はこの宗教における善悪を**俺ら系統の善悪**と呼ぶ。彼は物事の善悪を俺ら系統の善悪で判断する。

彼はこの宗教の目的の方向により分岐された対象や対象の存在及び状態及び運動を善と比較的に判断する。彼はこの宗教の目的の方向により分岐されていない対象や対象の存在及び状態及び運動を悪と比較的に判断する。彼は「比較的に」という副詞を無視しない。善悪二元論では、対象や対象の存在及び状態及び運動は善か悪であるのかの二元論的に信仰された。彼はこの善悪二元論を機械的と認識する。

この時、彼は運転手や意識（蟲）は機械的でないと認識するので、善悪二元論は運転手や意識（蟲）の世界から見るとより分岐的でないと審判する。だから、彼は善悪二元論を善と比較的に判断しない。日常的には、彼は善悪を0と1の離散的な対象でなく、少数のような連続的な対象（スペクトルの？）と信仰する。

彼は善悪を分岐で正当化する。分岐はこの宗教の目的である。目的とは、実現したい対象や実現したい対象の存在や状態や運動である。

この宗教における分岐は儒教における礼やキリスト教における罪に対応する。例えば、儒教では、殺人行為は非礼である。非礼は悪いので、殺人行為は悪い。このような流れが存在する。キリスト教では男女平等は善である。なぜなら、この世界の創造主がその目的を持ってこの世界を男女平等を実現するように創造したからである。創造主は男女平等というその目的を創造主の意志と信者の意志でこの世界に実現する必要がある。

上記をまとめると、一般的に、あるシステムの創造主の目的がそのシステムにおける善悪を正当化する。彼はこの考えをこの宗教にも応用して、この宗教における善悪を彼の目的で正当化する。つまり、分岐が善であるのは、彼がこの宗教システムを俺の目的によってそのように創造したからである。

彼はある物事を知覚する。彼はある物事をより分岐的であるのかを俺らの系統の認識で認識する。次に、彼はその物事の善悪を俺ら系統の善悪で比較的に判断する。俺ら系統の知覚→俺ら系統の認識→俺ら系統の判断。

彼は俺ら系統の善悪を使用して、次の善悪を判断する。例えば、彼はクチャラー行為の善悪を判断する。彼は動物を観察する。この時、動物の全ては食べ物をくちゃくちゃ食べる。彼はこの行為を行為aと置く。それに対して、人間は食事を音を立てずに食べることができる。彼はこの行為を行為bと置く。

彼は行為bは行為aより分岐的と認識する。彼は行為bをより善と俺ら系統の善悪で判断する。この宗教の目的がこの善を正当化する。従って、彼は行為bをより善と俺ら系統の善悪で判断する。悪の場合は次である。彼は行為aは行為bより分岐的でないと認識する。彼は行為aをより悪と俺ら系統の善悪で判断する。この宗教の目的がこの悪を正当化する。従って、彼は行為aをより悪と俺ら系統の善悪で判断する。彼は物事の善悪をこのように判断する。

この宗教では、彼は運転手をより分岐した存在（または対象）であると信仰する。彼はこの存在を存在aと置く。彼は意識を存在bと置く。彼は物質を存在cと置く。この時、彼は存在aを存在bよりも分岐していると認識する。彼は存在bを存在cよりも分岐していると認識する。上記と同様に考えると、彼は存在aを存在bより善と判断して、彼は存在bを存在cよりより善と判断する。ただし、彼は物質の存在それ自体を否定しない。否定すると、意識や運転手もなくなる。

## 「俺ら」系統の富の規範

以下では、彼は俺ら系統の富を提示する。この宗教では、彼は下記の富の規範に沿って、富を取り扱う。彼が俺ら系統の富を考えると、彼は自己と所有、そして富それ自体を認識する。

一般的に、富はx教系統の富という形式で存在する。宗教が異なる時、異なる富の規範が存在する。実際、ユダヤ教徒の富の取り扱いとキリスト教徒の富の取り扱い、そしてイスラム教徒の富の扱いは互いに異なり、それらの違いが富に関する争いを引き起こしてきた。また、イスラム教では、利子が禁じられているらしい。

彼がある対象を俺ら系統で所有するとは、彼がその対象を彼の意志で運動させることができることである。彼は運転手である。運動には、静止も含まれる。例えば、彼が土地を所有するとき、彼はその土地を物理的に運動させることができない。そのため、彼は運動に、静止や管理・統治も含める。ただし、上記の場合、会社員が所有されてしまう。そこで、彼は対象との契約や共通認識無しにという文句を入れる。彼は上記に納得していないので、現時点での俺ら系統の所有である。

彼は運転手が意識（蟲）や物質を所有すると信仰する。この宗教では、彼は運転手を自己と信仰する。その自己が自己の意識（蟲）や自己の肉体を所有する。例えば、肉体を車体と仮定すると、車体の中の立体映像や画面が意識であり、車体の中の運転手が自己である。その運転手が車体と立体映像を所有する。

一般的に、人々は彼らの肉体が土地や食料を含む物質を所有すると感じてきた。この宗教では、俺らはこの種の考えを採用しない。所有する主体は運転手である。

彼は所有を次の二つに分類する。一番目には、運転手が自己の意識と自己の肉体を所有する。彼はこれを**一次所有**、または**直接所有**と便宜的に呼ぶ。二番目には、運転手が自己の意識や自己の肉体を通して、外部の意識や外部の物質を間接的に所有する。彼はこれを**二次所有**、または**間接所有**と便宜的に呼ぶ。

一次所有の範囲とは、自己の意識が生じる範囲である。もし無人機の中に彼の意識が発生するならば、彼はその意識を知覚できるので、彼はその無人機を一次所有する。そして、一次所有の範囲は彼の肉体の中とその無人機の中である。もし彼の腕が彼の肉体から切断されるならば、その腕は一次所有されない。しかし、他者の腕の移植や機械が俺の肉体に接続され、かつその腕や機械に意識が発生するならば、その腕は一次所有される。

二次所有には、例えば、彼が車を所有することがある。彼が車を所有したいとき、彼は彼の意識と彼の肉体を彼の意志で操縦して、肉体の外部に存在する車体を所有する。外部から見ると、彼の肉体が彼の車を所有しているように見える。また、二次所有では、彼は他の生物の意識と物質を所有できる。だから、彼は意識と物質を持つ動物を家畜として所有できる。彼は牧畜を二次所有する行為と解釈する。

**俺ら系統の富**とは、運転手（自己）が所有する対象である。具体的には、彼の意識や彼の肉体は富である。彼が所有する車や不動産やゴールド、お金は富である。

彼は富を次の二つに分類する。一番目には、運転手が一次的に所有する富がある。彼はこの富を**一次富**、または**直富**と呼ぶ。二番目には、運転手が二次的に所有する富がある。彼はこの富を**二次富**、または**間富**と呼ぶ。

一次富には、自己の意識と自己の肉体が存在する。もし自己の意識が無人機などに発生するならば、その無人機も直富になる。二次富には、自分が所有する車や電子計算機や家や土地や食料や衣服が存在する。また、お金も富である。たとえそのお金が紙幣であるとしても。

## 「俺ら」系統の性

以下では、彼はこの宗教における性を提示する。例えば、ユダヤ教系統の性のあり方はイスラム教系統の性のあり方と異なる。ユダヤ教における男性とは何であるのかはイスラム教における男性とは何であるのかと異なる。このように、男性や女性はx教系統の男性やx教系統の女性という形式で存在する。そこで、彼は俺ら系統の男性や俺ら系統の女性を提示する。さらに、彼は男女と雌雄を明確に区別する。

**動物的性**とは、動物が持つ性である。動物的性には、雌と雄がある。例えば、サピエンスには、サピエンスの雌とサピエンスの雄がある。動物的性はY染色体やX染色体という物質に還元される。

**人間的性**とは、人間が持つ性である。人間的性には、男性と女性がある。俺の知る範囲では、動物には、女性と男性は存在しない。正確には、男性とは、x系統の男性である。女性とは、x系統の女性である。xには、宗教や文明が代入される。口語的には、男性とは何であるのかは文明や宗教によって認識される。この宗教では、男性とは、俺ら系統の男性であり、女性とは、俺ら系統の女性である。

物質には、性がない。彼が性を無理やり導入するとき、彼は物質に対する+と-を使用する。または、彼は性を印欧語族のように空想的に見出す。

彼は上記の性を次のように信仰する。動物的性は物質的性よりも分岐している。人間的性は物質的性よりも分岐している。男性は女性よりも分岐している。雄は雌よりも分岐している。+と-は不明である。彼は性を分岐という観点から認識する。また、彼はこれらの性をさらに分岐させる。つまり、彼は人間的性よりもより分岐された性を創造する。さらに、俺はそれぞれの性でも分岐された性を創造する。つまり、雄でも雌でもない動物的性を創造する。



## 「俺ら」系統の刑罰

以下では、彼はこの宗教における刑罰を与える。彼がサッカーシステムのような運動競技システムを作るとき、彼は違反行為に対する罰則（刑罰）を定める必要がある。同様に、彼が社会システムを形成するとき、彼は刑罰を与える必要がある。

また、世界には、様々な宗教系統の刑罰が存在する。例えば、イスラム教系統の刑罰とキリスト教系統の刑罰は互いに異なる。そして、人権に関して、しばしば問題が生じてきた。刑罰もまたx教系統の刑罰という形式で存在する。

彼は物質に対する刑罰と動物に対する刑罰と人間に対する刑罰を採用する。人間は運転手に対応して、動物は意識（蟲）に対応する。物質は物質に対応する。例えば、彼は人間に対する刑罰とサピエンスに対する刑罰を分けて実行する。

彼はより分岐された主体（対象）が刑罰を実行することを善と判断する。彼はより分岐された主体（対象）が刑罰を実行することを善と判断する。彼が刑罰を考えると、彼は誰が刑罰を下すのが正当であるのかという問題に行き着く。つまり、彼は刑罰の主体の正当性に関する問題を宗教的に解決する必要がある。

この宗教では、彼はより分岐された主体や対象が刑罰を下すことを善と判断する。この善性は分岐によって正当化される。要するに、彼は彼の運転手や意識（蟲）は物質的世界から分岐した存在であるので、それらが何かを罰することは正当であると信仰する。このとき、彼は創造主なしに刑罰の正当性を獲得することができる。

俺系統の損害が俺系統の刑罰を導く。例えば、サッカーにおけるハンド行為は損害を他人に与えていない。けれども、サッカーシステムの創造主がそのように決定したので、ハンド行為に対する違反が罰則になる。

この宗教では、俺らは損害なき刑罰を採用しない。西洋では、たとえ損害がないとしても、創造主の言葉や文字に対する違反が刑罰の対象行為になる。その結果、豚肉やアルコールを摂取してはいけないという決まりが生じて、その決まりに違反すると、なぜか刑罰を科される。

しかし、この宗教では、俺らは自己や他者に対する損害が生じたので、その損害に応答して刑罰が科されると信仰する。俺らはこの種の考えを「損害的刑罰」と便宜的に呼ぶ。

## 俺系統の約束（契約）

現時点では、彼は俺系統の契約について考えていない。契約もまたx教系統の契約という形式で存在する。ユダヤ教系統の契約はキリスト教系統の契約と異なる。東洋文明では、東洋人は契約の概念を持っているのかは不明である。例えば、富がエネルギーそれ自体であると仮定すると、約束は物質同士のエネルギーのやり取りに関する物理法則に対応する。たとえある主体が富の規範を

持つとしても、もしその主体が約束を守ることができないならば、富の流れは正常に機能しない。だから、富の規範と同様に、約束が必要である。また、約束は法律や統治にも関係する。現実的には、国民国家の概念それ自体も西洋文明における契約の概念に基づいている。

以下はメモである。例えば、イスラム教では、豚肉を食べることは悪い。なぜなら、その行為はアッラーとの契約に反する。しかし、この決まりには、意味がない。創造主が言ったからである。彼は違和感を覚える。彼は意味を持つ約束を考えたい。

また、西洋文明では、約束は自由意志による合意であり、個人の自由意志によって、結ばれる。しかし、この場合、インディアンからの土地の略奪や黒人奴隷が自由意志による約束によって正当化される。俺は自由意志による契約に違和感を覚える。さらに、キリスト教徒の白人の契約は自然でなく、非常に人工的である。さらに、大人間における機械的な合意は存在するが、認識や判断がないように見える。彼は認識や判断や善悪を持つ約束を考えたい。ここでは、彼は機械的な契約と動物的な契約と人間的な契約を提示したい。